

# この夏

倉橋惣三

## 仙 台

旅のこの夏は、仙臺針久別館の夜に初まる。白蚊帳の中で按摩にもんで貰ひながら、月の松島のことばかり考へてゐた。その夜は珍らしい良夜で、澄んだ空に、舊六月十五日のまるい月が、仲秋の満月のやうに冴えてゐた。この夜を、折角こゝまで來てゐて、なぜ松島に泊らなかつたかと、さつきから、それがくやくしてならなかつたのである。私はふと言つた。「今夜の松島はいゝだらうね」と。そして、直ぐハツと思つたが、按摩は手も休めないで、「へえ、さぞいゝ眺めでございませうな」と答へた。勿論その按摩は盲人である。私はバタ／＼と團扇を使つて、きまりわるいやうな、すまないやうな、何んともなくをかしいやうな、其の場の心もちをまぎらしたが、仙臺の宿で、盲人の按摩と、松島の月景色を語つたといふことが、なんとか十七文字にまとまらないものかと、その後二三日は、暇があると考へて見たものであつた。

翌三十日。文都省主催家庭教育講習會の最後の時間を、縣立第一高等女學校の講堂で正午まで講演して、會員諸君の茶話會に臨み、更に太陽幼稚園の靜田正志君、同幼稚園保母養成所長佐藤基君、宮城縣學務部長外山福男君等と共に午餐の後、同養成所の保育講習會にて講演。停車場で、文都省の小尾課長大場榮作君等と落ちあひ、山形市への途を、その夜は鳴子温泉に泊ることにした。

鳴子温泉は、宮城、山形兩縣の境に近い山の温泉で、山氣さすがに冷涼。浴後、三階の欄に近く籐椅子を寄せて、四方の山を見るのも、此頃稀に恵まれた閑時間だ。正面の峠を小豆坂といふ。小豆が煮える程の長い時間を要するといふのがその名の由來だなどと聞くのも、現代離れのした、のんびりとした氣もちになれる。あくる朝は殊に曉冷、山に圍まれて陽光のをそい川原に沿ふて、白い霧が立ち籠めてゐる。小尾、大場、兩健脚家は、朝飯前を、鳴子峽谷の探勝に出かけて行つた。弱脚家も少しは歩いて見たい。宿の前の町通りへ出て、名物郷土玩具「こけしおぼこ」の店を三四軒のぞき歩いた。圓柱が體、圓球が頭、どれもこれも、おさげに目尻の下つた可愛らしい顔をしてゐる。こけしは匍匐、おぼこは子ども、はい／＼人形といつたころか。その頭がくる／＼と廻るやうになつてゐて、動かすと鳴き聲をする。「鳴子のこけしおぼこ」とは、成程洒落るとよく讀めた。後で、宿へ取り寄せて、大中小いろ／＼の大きさを、せいの順に立たせて見ると、まことに純朴な、あどけないおぼこさんの姉妹達ではある。

## 山 形

三十一日夕、山形へ着。窪田知事の招宴で、古謡や當世小唄に夜が更けたが、温泉好きの話が直ぐ一決、宿は今夜も温泉にすることにして、縣社會教育主事三木惣太郎君の東道で、夜みちを、わざ／＼、上の山温泉までドライブした。それが既に一つの酔興なのに、私は、その時、もう一つの酔興をたくらんでゐた。それは、さつきの酒席でいろいろの山形辯を聞いたのから思ひついて、山形語の幾つかを、あすの講演用に仕入れたいといふことであつた。そこで、山の宿の、小虫の來る電燈の下で、手帳片手に方言教授をうけたものだ。今その手帳を出して見ると、こんなことが書いてある。

おぼこ——子ども。

めごい——可愛い。

まつちゃん——父。

かいざ——母。

ばんちゃん——祖母。

そばえる——甘える。

むつませ——仲よい。

こじやかれる——叱られる。

此の語彙で、大抵私のもくろみも察せられる譯だが、さて、それはほんの酔興、眞劍な自分の話は、自分の言葉でなくては話せないものだといふことは、あすになつてぞ分りける次第であつた。

八月一日。午前、山形市外の名勝羽前の山寺を訪ふ。満山奇岩。慈覺大師入定の地。芭蕉句あり、閑けさや石にしみ入る蟬の聲。」

午後、縣公會堂に於て講演。聽衆中に、うれしくも特に市外から來た、もんべ姿素樸なる農村のかゝさ、數名あり。私の家庭教育の話は、その理外の凡味を、こらいふ人にこそ、最もよく分つて貰へたであらう。

## 福 島

ゆうべ、山形から福島に來て、飯阪温泉に泊つた。此の旅、三夜つゞけて温泉の客となつたが、温泉はやはり山でないに興味が深くない。

福島縣立高等女學校に於ける、家庭教育指導者協議會は、此頃多く臨席する同種會合の中に於て、最も出色のものゝ一つであつた。第一、婦人諸君のみの會であつたこと、その多數が縣下に於て、それぞれ永き經驗を有する篤志熱心の人々であつたこと、而して、その方々が存分に語り合はれて、意見、殊に實驗の交換が續々と行はれたこと。此の會を斯うしたものに成功させる爲の縣當局の準備の苦心を思ふと共に、文部省の招きに應じて、聽く爲めばかりでなく語る爲めに集るべく、日頃の用意を豊富にもつてゐられる縣下婦人諸君に對して、私は深き敬意を感ぜざるを得なかつた。

午後講演。その夕、川久保學務部長の招宴をうけたが、阿武隈川に臨んで廣々と明け放たれた旗亭の清風は、風光に惠まるゝことの多かつたこの夏の中でも、忘れ難いものゝ一つである。あの、廣く長いぬ

れ椽の、黒光りする古雅な木目の上の、おぼまかなく、つるぎは、東北地方ならでは味へぬものであらう。

## 長 崎

福島から一旦東京に歸つて、四日午前、土川氏の昭和保姆養成所の講習を終へ、大井から東京驛へ、そして愈々午後一時發の特別列車「富士」の客となつた。愈々といふのは二年越宿約の長崎へ、一路直行するからである。文部省の保育講習と昭和保姆養成所の講習とを聴講の爲め、わざ／＼上京された大塚喜一君が京都まで同車。同君の熱心は、東海道五十三次まで保育々々で走りつゞけた。

文明の利器は早いものだ、なんて言つたら、今どき、幼稚園の幼児にも笑はれさうな舊式な言ひ草だが、きのふの午後一時に江戸をたつて、けふの三時にはもう長崎の宿で冷い紅茶を飲んでゐるとは、なんといつても早いことだ。アメリカ横斷の最特急はもつと驚くよなんて、そんなことは言ひなさんな。江戸と長崎とじゃありませんか。これでは仇討もなんでもなく出來さうだが、友達に會ふのは一層難作もないことだ。待ち遠しかつた丈けに、それだけ早いもんだと嬉しかつたのです。

長崎縣保育會は設立後まだ新らしい。しかし前會長が熱心に其の創立と發展につくされたる後をうけて、縣立女子師範學校の現校長清水曉昇氏が會長として、熱心其の任に當つて居られ、副會長、附屬小學主事田中得三氏、顧問志賀親久氏、下川龍爾氏、幹事松尾利信、高島スミ、田村イト、向井マユミ、

伊藤ツル諸氏の協力によつて、縣下保育の發展の爲め力を竭してゐる。しかも、其の最も力強き中心動力として顧問下川龍爾氏のあるは、保育界の爲めに大いなる幸福である。下川氏は教育の職にある人ではないに拘はらず、幼兒教育の深き理解者として、私財を投じて城山幼稚園を設立し、向井マユミ氏を園長として、進んで縣保育界の爲めに各方面の寄與をされてゐる篤志の紳士である。滞留中懇切に至らざるなく、四日間の長崎見物は、常に同氏と附屬小學校の田中主事との御案内を煩しつゝけた。

長崎に着くの日、私は、直ぐに長崎の印象がつかみ度かつた。其の希望に基いて、先づ行つたのは大徳寺であつたが、旅館上野屋を出て數歩、本下町の中央公設市場へ下る途中、石敷道の突き當つて右と左へ坂段になつてゐるところ、私はもう、古い長崎の人になることが出來た。今架け替へ中の我國最初の鐵橋の横の假橋を渡つて、細い賑かな町を通り越すと、しあん橋、あきらめ橋。既に情緒を促して、音に名高い丸山の廓内を、つまさき上り、上りつめた所が大徳寺であつた。こゝから眺められる長崎は一番きれいな長崎だと何かに書いてあつたが、成程、斜面を段々に灣まで見下ろして、其の向ふに對岸の町を見る眺めは、夕暮の中に趣の甚だ深いものがあつた。

六日。午前、縣立高等女學校の講堂で講習。今日から三日間の保育の講習は、熱心なる聽講諸君の蔭で、さしにも暑い中を、いつの間にか過ぎて行つた。そして、此日の夜は公會堂で、家庭教育の公開講演を行つたが、その他の時間は、一切が長崎見物に費された。講習に招いて、實は、私を喜ばす爲め

のプログラムで一ぱいであつたと言つていい。

第一日の午後は、古い長崎の居留地區にある古いホテル・ド・ジャボンでの晝食に、古びた建築、調度を私が餘り興がるので、支配人に、却つて變な思ひをさせたらしいのも可笑しかつた。大浦の天主堂は規模は小さいながら、キリシタン長崎の古い香りの、こゝに一番濃い思ひがした。堂は細く高い石段の上にあつて、左右に棕櫚の木を配した入口の中央には、「日本の聖母」の像が立つてゐる。私は、小暗い中に色障子の光線の沈んでゐる堂の奥から、その像の後姿を、しみじみとなつかしんで見た。像のすぐ後に近く立てば、その滑かな撫で肩を越して、眞ひるの日光を、ものうげに反射してゐる海が見える。朝を、晝を、夕を、星の夜を、こうして靜かに立ちつくしてゐられる聖母の眼は、果して何を思てゐられるのであらう。その信仰を知らない旅人は、たゞその姿をけ高く見るばかりである。それから、特に自働車を先きにやつて置いて、崖に沿ふて南山手の通りを歩いて見た。「こゝは歩かなければ」と下川氏が言はれた通り、歩々に靜かな味のあるところだ。古い石敷道には、八月の日光だけがあつて、下川氏のヘルメットと田中氏の長身とが、黙つて私を導いてゆく。こういうところは、沈黙ほどいゝ案内はなし。――

古りにける港の道の石だゝみ

明くれば暑く日は照りにけり

赤彦の歌つた長崎の歌だ。

それから崇福寺を訪ふた。これは支那長崎の粹といつてよいものである。私の眼はホルトガルから、急に支那の内地に來た譯だが、斯うした錯綜情調の中にこそ、長崎といふものゝ姿があるのかも知れない。浦上の天主堂は新しい建築で、規模も大きく、大浦のとは全く異なつた、今の趣しか感じられないが、堂内に膝づいて聖書を讀んでゐる少女、床に端坐して黙禱してゐる老人、赤い布幕を隔てゝざんげ僧にざんげしてゐる中年の婦人、そこへまた靜かに入つて來た二人の青年。こゝが日本であるだけに、ローマのカセドラルでは却つて感ずることの出來なかつた異國情調の生々しいものが漂ふ。但其夕、三菱の佐々木得定氏の懇々家庭的御饗應では、異國どころか旅ごゝろまで飛んで仕舞つた。

七日の午後にはシーホルトの舊宅を訪ふた。我國新文化の上に及ぼした博士シーホルトの偉大なる貢獻に就ては、史家の詳かに教へる通りである。しかも、今此の舊宅趾に立つて思ふことは、此の獨逸人の其の時の心境である。而して其の心境の中には學問に對し、日本に對し、異種の本草に對する強い愛着と共に、自分を取圍む眞摯にして、純良なる若きサムライ學生等への愛着が、どの位強烈なものであつたらうか。——雜草生ひ繁る丘の上に、その胸像を仰ぎつゝ、こんなことも思はれてならなかつた。その夜、富貴樓で卓袱料理の御馳走をして下さるといふことは、きのふからの私の大きな樂しみであつた。それは、あながち、私の食道樂のせいのみではない。長崎へ來て富貴樓のシツボクの卓を試みな



いのは、仇の傍へ来て、仇をとらないやうな話だからである。しかも、此六月のチプスの大猖獗は、或は此の望みが達せられないのではないかと、多分の危惧をもつてゐたからである。但し長崎へ着いてからは、傳染の心配は既になく、注射までして來た取越臆病を我れながら可笑しく思つてゐた程であつたが。席は保育會の方々の外、遠藤、宇野、川崎、中山、佐々木、太田、瀧、市川、山口諸氏。

その夜は味も色も音も皆美しかつた。殊に、座敷から見ると坂の斜面に沿ふて町の灯のつゞくのも、港の夜らしい味が深い。しかも、その賑かな中にわびしさの通ふやうな其の夜の氣分を、一段と色濃く染めて呉れたものは、老妓愛八の唄の聲であつた。

沖の黒船いかりをまけば

沖のかもめもすゝりなき

私は、おことわりするまでもなく其の方は頓と野暮天、技のうまさまづさの分る耳ではないが、長崎名物として此の人の名は豫て聞いてゐたことがあり、殊に、この旅の汽車の中で讀んだ「文藝春秋」に此の人のことを取材した文があり、俠氣一本にあかぬけきつた其の話し振りは、其夜の澤山の御馳走の中でも秀逸であつた。私は座布團を縁側に移して貰つて、柱にもたれながら、更けた夜を、もう一度その人の唄を所望したりした。あすは立つてゆく長崎の夜、惜しみながら。

## 雲 仙

八日、午前の講習を終つて宿へ歸ると、懇な皆さんの見送りと共に、もう、雲仙ゆきの自働車が用意されてゐた。東道の主は、下川氏、清水校長、田中主事。

途中古賀村の福瑞寺に立寄り、そこで熱心に經營してゐられる農繁期託兒所のお話をき、更に古賀人形の製造家小川氏の家に赴き、人形を購ひ求めた。創業文祿元年より今に至る三百四十年。繪の具の色に多少新らしい生々しさのあるのを惜しむ點もあるが、形には流石に古雅掬すべきものがある。

自働車は町に入り町を離れ、愈々雲仙の麓に近く硫黄泉の香のどことなく漂ひ來るを覺える。雲仙境に入つて、ゴルフ場のあたり、歐化雲仙の趣が美しい。有明ホテルに入つて、先づ一浴、嵐氣ひやくと、こゝは流石に夏を知らぬ。枕に通ふ溪聲も高山の夜を深めて、その夜の夢は雲か仙か。

九日。私は温泉に泊る毎に、朝の初湯を愛する癖がある。起きぬけに浴場へ下りてゆくと、田中氏既にあり、しかも洗ひ場に立つて待たれ、私の爲めに朝の初湯の快味を譲らうとしてゐられた。何たるやさしい好意ぞや。御遠慮なく其の好意をうけて、澄み通る硫黄泉を、ざんぶくとばかり、心ゆくばかりに、音を立て、溢れ流した。

さて、其日の行程は島原へ山を降りて、そこから連絡船で三角へ渡り、熊本からの汽車を捉へて鹿兒

島へ行くにある。歸路を迂回して、わざわざ島原まで送つて下さつた三君と別れて、汽船は風光明媚なる島原灣を滑に走る。

## 鹿 兒 島

鹿兒島市保育會の保育講習は、十二日から三日間縣立女子師範學校に開かれた。附屬小學校主事影山岩男氏、鶴卷學舎幼稚園長後藤猪六氏、錦城幼稚園床次うめ氏等見専ら斡旋、私の鹿兒島見物も亦、諸君の好意を煩はすところ實に多かつた。

鹿兒島は我國幼稚園史上先驅者の一。明治初年、時の東京お茶の水幼稚園の第一回の保姆たりし豊田女史が、特に招かれて、こゝに幼稚園創設の任に當られた由緒深き地である。その幼稚園は此の女子師範が獨立する以前であつて、今度、その史料を詳かにせんとしたが得られなかつたのは遺憾であつた。しかし、當時、豊田女史の講習を受けて、爾來保育の業に勤續してゐられる人も尙ほある。

鹿兒島の幼稚園は、此の女子師範附屬の他は、多くは、否、殆んど皆、鹿兒島特有の「學舎」に附設せられてあることも一つの特色である。「學舎」とは、舊藩時代の郷中制度を繼承したる、青年修養の社會機關であつて、昔は士風教養の淵藪たりしもの、今日は昔日と其の趣を異にするところの多いのは當然であるが、矢張り、一種の青年修餘機關として重要視せられてゐるもの、今日市内外學舎聯合會に

加はれるものだけでも十六。私立幼稚園が、それに附設せられてゐるのである。

三日間午前の講習と共に、十一日夜教育會館に於て、公開講演會が行はれたが、來聽者數百に餘り盛大を極めた。たゞ、維新以來多くの知名士を生める此の鹿兒島の家庭に向つて、私の平凡なる家庭教育論は、或は極めてお、この至りであつたかも知れない。

宿の岩崎谷莊は、蓋し、私の知る限りの旅館中、最も豪奢なるもの、一つである。巧をつくしたる庭を越えて、正面に櫻島と相對し、朝に夕に、光彩の變化濃かなる島の眺めは、誠に飽くところを知らなかつた。

影山氏は、私を先づ、其の櫻島に連れて行つて下さつた。發動機の渡船の着くところ、そこから、直ぐ驚威なる奇觀である。あの大爆發による熔岩の壘々たる壯絶豪宕なる偉觀は、誠に之れ到底筆の盡し難きところ、言語に絶するもの。恐らく常の自然の聯想の域を超絶して、世界無類唯一の奇勝だからである。

西郷翁の墓に詣で、城山に登り、西南戦役の遺跡を訪ひ、中學生時代初めて此の偉人の傳を愛讀した時以來の敬慕、崇仰の宿願を達し得たことは、この夏に於ける、私の精神的最大の記念である。昨年「この夏」には、會津を訪ひ、山口を訪ひ、萩を訪ひ、私の乏しき維新史觀の上に、深甚の感激を加へ得たことを語つたが、今年此の鹿兒島に来て、更に、私の小さき維新史料を充填し得たること、年々

歳々、何んたる多幸の收穫ぞや。城山に倚る岩崎谷莊の第一夜、圖らずも南洲翁を夢みて、深更思はず蕭然として眠りを破りしも、今に忘れ難き印銘である。

櫻島の壯觀、南洲翁の偉想。それとは又別に鹿兒島で會つた人々の懐しき思ひ出よ。その中には、下總成田幼稚園の初代の園長として、當時未だ若かりし私を屢々お茶の水に訪ねて下さつた猪狩ゑい老女史と令嬢もあつた。その時代よりも尙は以前に、私の教場の若い女學生であつた、今の醫學士望月章氏夫人もあつた。旅よ、それは、新らしい土地に、新らしい人を追ふばかりのことではない。

## 吳

十二日夜おそく鹿兒島の驛に舊知新交の人々と別れて、九州を北に貫き上り、翌朝關門海峽を渡つて山陽線に移れば、さすがに、もうだいぶん、中野の我家へ近く來たやうな感じがした。旅をつゞけるものゝみが知る心もちであらうか。

廣島縣主催の家庭教育指導者講習會は、吳市にて十四日より三日、福山市にて十七日より三日間のプログラムになつてゐた。廣島驛で、縣社會教育主事澤原正登氏に迎へられて、吳線に乗り換へる。

翌十四日、縣學務課長郡山義夫氏來吳。氏は昨夏以來の舊知、家庭教育振興の熱心なる當局者としてのみならず、私の説くところに對する最も感謝すべき共鳴者の一人として、爾來交誼を厚ふところ

今回の広島縣滯留中、澤原氏と共に、懇切款待を極められた。

呉市では、水交社の講演と、伊藤氏の御案内で市内見物の外、海軍中心の新都會は、さすがに懷古趣味や風景見物の土地ではなかつたが、十五日午後澤原氏に案内を乞ふて、音戸の瀬戸に遊んだのは、之れこそ、宿望中の最も長い宿望を遂げたものと云つてよかつた。特に案内を乞ふてといふのも、その意味がもつたからである。さて、その長い宿望とは何か。音戸の瀬戸の風光を味はふことも其の一つではあるに相違ないが、それよりも強い、而して、頗る愛すべき興味としては、その倉橋島に一寸でも足を踏み入れて見たいといふ、恐らく小學校時代からの宿望であつた。瀬戸内海に、自分と同じ名の島があるといふことは、そこが自分の郷土でもあるかのやうの興味を、子供心に持たせられて居たからである。子供時代ばかりではない。つい昨年広島に来てゐた時にも、此の島の名を言ひ出して、買へるものなら自分のものにして、小さな城でも築きたいと云つて笑はれた位であつた。

島は中々大きい。なか／＼以て、買ふの買へるのと、じやうだんにも言へたものではない。後に澤原氏を煩はして披見することの出來た絶版「倉橋島誌」によると、本島及び屬島總て十二。本島の面積は約三方里。東西に長くして四里、南北に短かくして三里だといふのだから大したものである。音戸は現村制に於て、倉橋島村は別になつてゐるが、陸つゞきになつて居るのだから、この夏は、まあ、その音戸の岩鼻に立つて、一寸でもベニスに足をつけたらセーフと云へる位のことと諦めて置かなければな

らない。更に他日、志成らばなど、力んで見てもいいが、それよりもまあ、天平八年夏六月（今から凡そ一千二百年近くの昔）大石斐鷹卿といふお人が、新羅使として下向の時、此島に寄泊して詠じたといふ歌が、萬葉集卷之十五にあるのを口ずさんで満足して置かう。

故悲思氣美奈具左米可彌底比具良之能奈久志麻可氣爾伊保利須流可母。

## 福山、鞆、府中

十六日、吳の講習から直ぐ福山へ移つたが、宿は特に涼しい海邊にといふので、美しい鞆が選ばれた。福山の講習は、四百餘の會員講堂に満ちて非常の盛會であつた。此頃は暑さの頂上、語るものもだがぎつしりつまつた席に、聴く方もなか／＼容易のことではない。それに、第一日夜は府中町まで行つて講演、第二日夜は鞆の町の講演、第三日午後は福山町で公開講演。随分と大勢の人を暑がらせたが、府中の宿で、近く夕暮れかゝる山々を見ながら遠藤校長から聞いた古代史跡の話の興味と、鞆の對山館で仙酔島を目の前に海風を満喫した涼しさとは、私の勞を慰めて充分以上のものがあつた。前者は、此山を越へてゆく道は出雲簸の川につゞく、その道は素盞鳴尊の海より出雲に入り賜ふか御道筋に當るといふ、思ひを幽遠の過去に走らせる史談であり、後者は、瀬戸内海中でも絶勝といはれ、對潮樓の扁額に所謂「日東第一形勝」の佳景である。而して、その間、府中町長福島松太郎氏、同小學校長遠藤正、篠

原信夫兩氏。鞆町長高橋泰一氏、同校長桑田徳夫氏、其他諸君の交誼を受けたが、府中町婦人會の赤松ひで氏、鞆町婦人會の林睦氏の熱心をも忘れることは出来ない。殊に林夫人は婦人會をリードして幼稚園を設立し、素封家の令夫人として自ら保姆となり、實際保育に當りたい熱心をさへ持たる、篤志家である。幼児教育に於ける我等の同志は大都市以外、隠れたるにも多くある。

## 三 原

十九日、福山の講習と講演とを終つて、直ちに三原に来て、岩井豊夫氏及び昨年夏以來の舊知諸君に迎へられて、夜の公開講演をした。此講演の爲めには、昨年夏「この夏」以來、私の西下の度びに、幾度びの機會を熱心に求められながら、その都度、時間を得られないで過ぎ重ねた、謂はゞ借り越しの講演である。此日午前、午後、夜、三度の講演は相當苦勞でないでもなかつたに拘はらず、私をして喜んで三原に途中一泊をさせた所以であつた。

## 徳 山

二十一日から三日間、山口縣主催の保育講習を徳山町で開催。昨年山口市での講習以來の重ねての講習である。山口縣の此の熱心が縣學務課長白石喜太郎氏、視學山東百合雄氏、同久芳庄二郎氏、縣幼稚



園掛池田秀夫氏、縣保育會の眞澄超倫氏及會員諸君等に負ふところ多きは、昨年と同様である。

いくら見物ずきでも、多少疲れ氣味といふ譯もあり、一夕竹村校長と楽しく語つた外は一切おとなしくして、この夏の初めての晝寝を楽しんで見たりした。宿の庭を隔て、近くに琴の師匠があり、それが毎朝、私の朝食の濟む頃から稽古を初めるのに、先づ琴三味線の調子とあはせるのが、いかにも心憎い程の濫い音じめを聞かせて、私をいつも縁側に近く誘ひ出すのであつた。私は、平生から此の琴三味線の音を好むものだ。それが旅だ。丁度、こゝへ宛て、宅から送り届けて來てあつた私の愛好の煙草を、ゆつくりと一本吸ふ間その琴三味線を聞くのが、三日の間の朝の日課になつたのも旅らしい楽しさであつた。一夜、町長堀田馬三氏の招宴の後で、久芳縣視學から突きつけられた色紙を、それこそ酔興に、旅にして秋を知る

隣りの稽古縁に聞く朝

と、よごして仕舞つたのも、こうした謂はれを説明すれば宥して貰へるだらう旅の恥だ。

## 岩 國

徳山から津へ急がなければならぬ途中を、きつと夜の急行に間にあはせるからといふ好意もだし難く麻里布驛で熊谷勝圓氏に迎へられて、自働車を急がせて岩國の錦帯橋と公園とを見、同氏の寺院境内に

新築の染香幼稚園を訪ひ、くつろいだ饗應に、こんどは私の方でゆつくりして仕舞ひ、夜汽車の時間に一ぱいに間にあふやうに、同氏と夫人と幼稚園の先生方との總動員見送りで、運轉手にフルスピードを出させた。岩國の錦帯橋といへば、子供の時の錦繪からのことだ。この旅で唯一の家庭的な招きを受けるとは、極くふさわしい懐しみのある名所ではあつた。

## 津

二十四日。三重縣主催の社會教育講習の第三日目が、私の番になつてゐて明日である。今日割合に早く着いて、夕方までに少し時間があるので、松阪の本居翁舊趾を訪ねた。四疊半の狭い二階に坐つて、こゝで、あの大研究と大著述が出来たのかと思ふと、原稿紙ばかり無駄にして、なんののかと、なまけてゐる者の、臆面もなく來られるところではないやうな氣がする。

二十五日。午前講習。高樓の海風に、白戸學務部長、青木學務課長、水谷社會教育主事諸君と共に午餐。

## 豊

## 橋

豊橋市立高等女學校校長山本嘉一氏の、家庭教育振興に熱心な人であることは、今年の「この夏」にも

記した通りであるが、今年も引つゞいて二十六、七の二日間、同様の講習會を、同校同窓會と愛國婦人會支部の主催で開催せられたのである。しかも、昨年にもまして熱心なる聽講諸君の態度は、熱心はたゞ主催者のみでないことを知つて嬉しかつた。豊橋幼稚園の大河内智香氏とも再び會つた。

此の間、宿は豊川——水の澄んでゐるのに、トヨガハと濁つて讀むのだといふこと——の岸に臨んだ可和樹旅館の別荘。海になれて來たものに、川沿ひの宿は、却つてぐつと落ちついた涼しさがある。東海道へ來たと思へば急に里心もついて來て、ゆるんだ氣持ちを、その川風にゆつたりと落ちつけて、打ち水にぬれた芝の上を、庭へ藤椅子を持出させて見たりしたのも、昨年の辨天島や蒲郡と、ぐつと趣向をかへて下さつた、山本校長の好意の賜であつた。

## お茶の水

豊橋から一旦東京へ歸つて、二十九、三十の兩日、埼玉縣教育會主催の講習を浦和でして、直ぐ、引かへして大阪へ行つて、一日から連續放送、三日から五日まで南區保育會主催の講習。それから六日京都市保育會の講習を濟ませて、七日の朝歸京、それで愈々「この夏」を終る豫定になつてゐた。ところが、世の中には何が突發するか分らないもので、二十九日午後急に學校への呼び出して、文部省の今度の學制改革案に對して、女子師範大學特設促進の緊急問題が起つて來た。此の際、私の中から一日も

東京を離れることは出来ない。三十日の午前の講習も時間を短く切り上げて學校へ歸るといふ具合で、とても大阪へ一週間も行つて居ることは出来ない。しかし、放送の方も講習の方も、もうすつかり準備の出来てゐる今日、急にことわることは、どんなに迷惑をかけるだらう。私は思案に迷つた。しかし、私は今、學校のものとしての自分を、一刻もゆるがせにすることは出来ない。決心した。電報、長距離電話。放送局からは、全く困窮といつて来る。無理のないことだ。南區の高濱さみの氏からは、何とか出来ないものかと、その迷惑が目に見えるようだ。しかし、私は、どうしても東京を離れられなかつたのみならず、この旅の記憶も、どこへか飛んでゆく程の忙しさを、一日の休みもなしに續けた。今尙ほつゞけてゐる。大阪へはまことに濟まないことだと思ふが、ゆるして貰ふより仕方がない。

そこで、「この夏」の終りは、東京といふよりも、お茶の水で結んで置いた方が適當になつたのである。

各地の方々の深き御高誼に謝意を表すると共に、わけても、おことわりしなければならぬのは、大坂京都の講習の方々である。此のお埋め合はせはきつと出来る時があるとは思ふが、今はたゞ忙しい。此の雜文も、編輯の方から督促されて、兎に角書いて見たが、讀み直す暇もない程だ。萬々諒されん

ことを。(九月十五日拂曉三時半擱筆)